

思考の鉅脈をめぐって

愛のアルシブラ

—フリーエ

橋爪大二郎

選挙なんかに出てくる泡沫候補の珍奇なおじさんが、よくいるでしょ。全世界平和連邦実現！とか宇宙救済教団とか、わけのわからないこと言っちゃって。フリーエも、それに輪をかけてはいさんだったらしい。言っちゃ悪いけど要するに、半気違いなんだよね。「幻視者」なんてえば聞こえはいいけど、同時代そっちのけの頓珍漢なことばかりわめいているわけだからさ、とうとう誰にも相手にされなくなっちゃって、まあろくな晩年じゃなかった。

シャルル・フリーエは一応、社会主義者という事になっていたので、こんなのと一緒にされちゃ大変、とマルクスにさんざんやつつけられた。それで、科学的ならぬ「空想」社会主義という、たいそう名譽な称号を頂戴したわけです。以後、「空想から科学へ」の時代が連綿と、割に最近まで続いておりました。

ところが科学的社会主義のほうも、ちつとも「科学的」でもなんでもないやい、と

いうことになってきて、風向きが変わった。おなじ空想なら、いっそ突飛なほうが面白い、ともいえるわけで。かくして、フリーエ再評価。当人もさだめし草葉の蔭で喜んでるでしょう。

だが喜ぶのは、まだ早い。フリーエ先生、天才的に想像力の塊だったとみえて、あとからあとから湧いてくる夢想をノートに書きまくった。生前出版にこぎつけたぶんだけでもかなりの量なのに、遺稿はそれに数倍するとか。でもこれが、ふつうに読める代物じゃないんだよね。なんせ半気違いなんだから。私はさいわい、「四運動の理論」しか読んでないけど、それで十分。やれ、オーロラは北極から射撃された精液であるのだ、「社会運動の推移表」(八万年にわたる人類文明の上昇と衰退がこと細かに予言してある)だの、並みの神経ではつきあいられません。ほかの原稿もこれよりひどいに決まっているので、もしも遺稿を残らず読み通して、フリーエの専門家になろうなんていう人がいれば、半気違いを通り越して本気違いなることを保証します。マルフリーエは早く生まれすぎた(大革命のとき十七歳でした)、と言うひともいるけど、私はそうは思わない。あんなおっさんが同時代人で隣に住んで、のべつあし

た話を喋りにやって来られちゃ、たまったもんじゃやない。あまり話が大きすぎて、注意しているつもりでも、放射能みたいに、支離滅裂がいつのまにかこっちに伝染するんです。私も昔読んだ「四運動の理論」のせいで、フリーエがうつつているのではな

いかと、じつは不安だ。そういえば、思いあたるふしもある。彼の学説(と言えるところ)の通奏低音をかなでるいくつかの発想。「情念引力」説——性関係の牽引/反撥の力学が社会関係の基本法則にかなえられるとする説……たぶん、こういうことなんだろうと思うけど——、だとか、「愛のフアランスチール(だったっけ?)」——TVA型の公共土木事業を推進するための、男女の性愛共産組織。週末、各自の労働の出来高に応じて、望む異性と同衾する権利を配分される——だとか。忘れかけてもまだ覚えているというのは、これはひよっとすると、キケンな兆候だ。

十九世紀、着実な実証の時代の幕開けに、フリーエのような過剰な想像力は、邪魔物以外のなにものでもない。(フリーエぐらい野放図な想像力なら、いつだって邪魔だ!)けれども幾星霜をへて、いまや科学のほうに想像力が秋波をおくる時代になった。だからフリーエだって、(大部分がセネタでし

ようけど)いちおう掘り直してみる値打ちぐらいあるかもしれない。

そうそう、そう言えは、アルシブラってのがあった。「完全肢」というね。将来の完全なる人類には、尾椎骨のところから、五番目の「手」が尻尾みたいにならざるにき生えてくるのだった。そおゆー便利なものが生えてこないようでは、人類が完全だと言えないじゃないか。なるほど。(詳しくは、フリーエ「アルシブラ」(巖谷國士訳・解説、「ユリイカ」69年11月号を参照のこと。)

思考の鉅脈をめぐって—フリーエ

でもどうせ生えてくるんなら、別なものの方がいいな。どうしてフリーエは気がつかなかったんだろ。私は声を大にして言いたい。人間は将来、異性の身体部分をそなえるようになるべきだ! すべての男性に女性器を。そして、女性に男性器を! なるほどいままで生まれたのはみんな、女性か男性のどっちかだった。(半陰陽は知ってるけど、ややこしいからちよつとタンマ。)でもそれはさあ、人間に生まれるための都合上、やむをえなかったのであって、かならずしもその必要がなくなるのが、そろそろだと思ふんだ。ね、考えるだけでもわくわくしませんか?

勘違いしちゃう困るが、私は性倒錯でも同

性愛でもなんでもない。健康このうえない男性であるし、そのことに一〇〇%満足しています。でも、思想の普遍性を追求する場合、男性の身体しかもっていないのはむしろかすと具合わるいのではないかと、思うんだ。もちろん杞憂かもしれないけど、こればかりは経験してみないと何んとも言えないでしよ。

「性と性殖の分離」が十分進めば、ひとが男か女のどっちかである必要は、なくなるに決まっています。あるいは、男/女の性別は、趣味ないし文化の領域にまると編入されると言ってもよい。そういう時代の遠くないことは、科学が教えてくれるので、べつだんフリーエのような想像力に頼るまでもない。ただ、私の生きてるあいだは無理だろうなあ。残念だなあ。

で、それまで待ちきれないひとは、もうだんぜん、性器移植に踏みきれない。私が言いたしつべになってもよいですが、男女有志で「愛のアルシブラ同盟」を結成するのは、同盟員は性器の登録をしておき、交通事故で不慮の死を遂げたりしたら、なるべく新鮮なやつをすかさず同志に移植、それでも不足する分は、広くシンパのひとびとから提供を受けましょう。かくしてこの同盟は、来るべき人類文化のさきがけ、

輝かしい実験の場になる。恋愛も結婚もみな、新しいかたち。一回で二度おいしいSEXだったにして、自分のからだをそのために役に立つとは、男(女)冥利につきるではありませんか(うわあ、もうすっかりフリーエ)。

最後にひとつお願い。「愛のアルシブラ」を体のどこから生やしたら具合がいいか、よいアイデアのある方はぜひおしらせください。

*"Fourier: archibras d'amour" by Daisaburo Hashizume 1986

